

同志社女子大学一般入試現代文対策講座

○同志社女子大学の現代文について（傾向と分析）

2017年度入試出題出典

- 一月二十六日 杉田敦 『政治的思考』
- 一月二十七日 高階秀爾 『日本人にとって美しさとは何か』
- 一月二十八日 中沢新一 『日本文学の大地』
- 一月二十九日 平川克己 『経済成長という病―退化に生きる、我ら』

2018年度入試出題出典

- 一月二十六日 田端博邦 『幸せになる資本主義』
- 一月二十七日 竹井隆人 『社会をつくる自由―反コミュニティのデモクラシー』
- 一月二十八日 藤野寛 『「承認」の哲学 他者に認められるとはどういうことか』
- 一月二十九日 平瀬礼太 『〈肖像〉文化考』

【対策について】

☆ 最大のポイントは『試験時間』

現代文はおよそ3000字程度（多ければ4000字） ↓ 原稿用紙7〜8枚
+

設問がおよそ20問（漢字語句系で約10問・文章挿入系約5問・内容契約5問

たとえば……

「漢字語句系問題」 ↓ 10分で通過

「文章挿入系問題」 ↓ 5分で通過

「文章内容系問題」 ↓ 1問2分で計10分で通過

現代文・古文あわせて60分のテスト、現代文に40分かかれたとしても
『文章を読む時間は15分しかない』（原稿用紙1枚分の文章を2分程度）

※ 間違いなく『試験時間への適応』の度合いが得点に直結！

「文章を読む力と選択肢を選ぶ力」

選択肢を選ぶ力を身につける必要性

得点力を支える『選ぶ力』

※ 選択肢間で、いったい何が違うのかを意識するようにしたい

☆ウソの選択肢を構成するパターン(超重要) 選択肢の『感覚』を磨け！

「文脈違反型」 最も多いタイプのウソ

「付加限定型」 解答に近いことが多いタイプ

「解釈要求型」 この選択肢がいちばん間違えやすい

「意味不明型」 ちょっと何言ってるかわからない(笑)

過去問演習で考えてみよう

— 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「人生とは、個人が自己を実現する、一回限りのチャンスである——」「自己実現」と要約されるこの考えを否定することは難しいだろう。それほどには、われわれは個人主義を **I** の前提として受け入れて生きている。

問題は、しかし、ここから始まる。「自己を実現する」というのが、それはどういうことなのか。ここには、植物の成長のイメージがはたらいっていないだろうか。つまり、一人ひとりの人間の中には、種子のようなものがセットされていて、それが発芽し、成長し、開花する、というイメージだ。ポテンシャル（潜在する能力）が各人に備わっていて、それが **II** 化されることを待ち受けている、という風にも描き出せるだろう。悪くないイメージではある。

しかし、問題がないわけではない。みんなが、個人として自己を実現したとしよう。その時、社会は成り立つだろうか。みんながサッカー選手として自己を実現してしまう？ みんなが芸術家・芸能人として自己を実現してしまう？（そういう想像が許されるほどには、サッカー選手や芸術家・芸能人が憧れの職業になっているのが現代社会だ）。もちろん、これでは社会は立ちゆかない。誰がレフェリーを務めるのか？ 誰がマネージメントするのか？ 誰が食事を作るのか？ 要するに、自己実現モデルは、社会生活と **III** しない。自己実現とは、もしみんながそれを現実化してしまつたら社会は空中分解せずにはすまない、そのような理念なのだ。社会という仕組みは、自己実現とは言い難い職種につかねばならない人なしには成立も機能もしない。 **A**、アットウ的多数の人は、そのような職業に就いて人生を送つてゆくことになる。

現実には、それでも仕事があるだけですが、というのが実情なのだろう。失業という事態は、経済生活を破壊するだけでなく、その人の自尊心を破壊する。失業手当がシキユウされればよい、という話ではすまない。

「自己実現」を、「ポテンシャル（潜在能力）の実現」と考えることが、そもそも不適切なのではないか。例えば、私には、自分のやりたいことをやってお金がもらえるという、恵まれた人生を送っていると感じるが、それは「自己のポテンシャルの現実化」という風に描き出せることではおそくない。哲学するための何らかの能力が私にあるとは、これっぽっちも感じない。（哲学科に進んだのは、右往左往みぎむきひだりむきの中、迷走の末のことではなかった。そもそも、哲学したかったのかどうかすら怪しい。事実上、消去法による選択だった。）

「自己実現」と言うのであれば、むしろ、「自己の欲求、欲望の実現」という風に考える方が実情に近いのかもしれない。しかし、そう考えると、能力の実現と考える場合とは、根本的なヘンコウを余儀なくされるだろう。というのも、能力であれば、あらかじめセットされていた（種子のような）ものとして考えることも不可能ではないが、願望・欲求は、あらかじめ個人の内にセットされていたものではありえないから。欲求は、社会的に——外部との関係の中で、外部から——受け入れられ、育て（上げ）られるもの以外ではありえない。 **B**、これはもはや「自己実現」とは呼ばれないものだ。実際、自己実現ということが、個人に定位して考えられるのであれば、個人の数だけ様々な自己実現の形があつてもよさそうなものだが、しかし、現実に見出される「実現が願われる自己」なるものは、どれも似たりよつたりというしかないのではないか。スポーツ選手だの、芸術家だの、芸能人だの、そこに多様性などおそくない。それほどにも、実現されるべき自己のイメージというのは、自己の外にあるのであって、自己の内部に——ポテンシャルとして——埋もれていたりなどはないのである。

「正義の他者」に収められた「アリストテレスとカントの間」という論考の中で、ホネットは、

人間の主体は、自分に同意したり肯定したりしてくれる他の主体たちの反応の助けを借りないことには、自己自身との肯定的な関係を作り上げ、維持することができないものだ

と指摘している。「自分自身との良い関係」を結ぶためにこそ、他者によって認められるという経験が不可欠なのではないか、

というのである。「自分自身との良い関係」というのは、それはそれで丁寧に考えることの求められる厄介な問題だが——キルケゴール『死に至る病』の問題だ——強引に要約すれば、「自分自身が何であるか」を正確に認識でき、かつその「自分自身」を肯定的に受け入れることができる、そのようなあり方だろう。(『死に至る病』の絶望は、ちょうどその逆であって、例えば「自己自身に絶望しつつ、その自己自身であらうと欲する／欲しない」という風に表現されたのだ)。そして、そこにたどり着くためにこそ、「他者から認められる」という経験を必要とするのではないかと問われるのである。自己自身との関係と他者による承認という関係との、その両者の関係を問うこと——例えば、これが、承認論の提起する根本の問いの一つである。

C、他者から認められるという経験が重視される。他者によって認められるからこそ、自分自身と——その欲求や能力と——肯定的に向き合うことが可能になるのではないかと問われている。かつて、有森裕子は、一九九六年アトラントオリンピックの女子マラソン競技で三位の成績をおさめた直後に「自分で自分を褒めたい」という感想を口にして鮮やかな印象を残し、人々に記憶されることとなったが、しかし、現実には、「自分で自分を褒め」ても——そうするだけでは——自信は得られないのではないかと。他者から——それも、大切な他者から——褒められてこそ、自分を褒めることも可能になるのではないかと。そして、実際、人間は、そのような経験を繰り返すことを通して、ようやく「ありのままの自分を生きたい」と望むことができるようになるのではないかと。

ホネットの承認論は、他者によって認められる経験の重要性を力説する。しかし、それは、「人目を気にして生きる」ことの意味ではない。「人に認められる」ためのハウツーが披露されるのでも、もちろん、ない。そうではなくて、「ありのままの自分を生きる」というような理念に対する問題提起——強く言えば、疑念の呈示——なのだ。自分の中をいくら掘り返しても、「ありのままの自分」など掘り出されはしないのではないかと。むしろ、ほとんど人々の中に身を沈め、人目に身をさらして生きてこそ、自己自身との良好な関係も、あるいは見出されるのではないかと。しかも、それが「自律」という理念によって表現されるようなあり方ともなりうるのではないかと——そういう提案がなされている。

承認論は、あるタイプの理想やきれいごとを疑問を突きつける思考だ。例えば、「真の自己」「ありのままの自分を生きる」「内発性」「自己実現」。D、むしろ、人と人の関係、社会性を重視し、その中で生きてゆくことこそ人間として生きることであると考える。人目を気にすることをショウレイするわけではないが、人に認められる経験の幸いを軽んじない。そうであればこそ、人にMに認められる経験がハバまれていような社会のあり方を批判する。

承認とは、そういうわけで一筋縄ではゆかない問題である。(藤野寛『承認』の哲学 他者に認められるとはどういうことか)より。ただし本文の一部を改めた。

- 問一 傍線部a～eと同じ漢字を使うものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。
- 解答番号は a 1 b 2 c 3 d 4 e 5。
- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|--------------|---|-------------|---|-----------|---|---|---|
| 1 | a | アットウ | 1 | b | 2 | c | 3 | d | 4 | e | 5 |
| | | | | | | | | | | | |
| 2 | b | シキユウ | 1 | 組織のトウセイをとる | 2 | トウテイ承認できない | 3 | 相手をバトウする | | | |
| 3 | c | ヘンコウ | 1 | 図書館のシショとして働く | 2 | 故人をツイトウする | 3 | ショシを貫徹する | | | |
| 4 | d | ショウレイ | 1 | 敷陣にシカクを送りこむ | 2 | 重大なシショウが生じる | 3 | コウザイ相半ばする | | | |
| 5 | e | ハバまれて | 1 | 契約コウガイが行われる | 2 | 先制コウゲキする | 3 | 水をレイキヤクする | | | |
| | | | 2 | 東京のコウガイを散券する | 3 | レイゼンに手を合わせる | 4 | 発展をソガイする | | | |
| | | | 3 | メイレイを実行する | 4 | カソの村 | 5 | ソゼイを納付する | | | |
| | | | 4 | 手洗いをレイコウする | | | | | | | |
| | | | 5 | ソマツな食事 | | | | | | | |
| | | | | 球技のガンソ | | | | | | | |

問二 液體部あ・いの語句は、文脈上、どのような意味か。最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号はあ [6]、い [7]。

- [6] あ 右往左往
- ① 目標が定まらず、意志とは逆の方向へ突き進むこと
 - ② 平常心を失って両極端の行動をとること
 - ③ 二つの考えが争い、収拾がつかなくなる事
 - ④ 様々な試みが失敗に終わり、行き場を失うこと
 - ⑤ 混乱してあちらこちらと動き回ること
- [7] い 内発性
- ① 内部にとどまる性質
 - ② 内部に秘められて存在する性質
 - ③ 意志が強固である性質
 - ④ 内部から自然に起こる性質
 - ⑤ 内と外に矛盾のない性質

問三 空欄A～Dに入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを重複して用いることはできない。解答番号はA [8]・B [9]・C [10]・D [11]。

- ① それどころか
- ② それに対して
- ③ それにもかかわらず
- ④ そこでは
- ⑤ そう考えると

問四 空欄I～Mに入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号はI [12]・II [13]・III [14]・IV [15]。

- [12] I ① 独自 ② 自明 ③ 必至 ④ 任意 ⑤ 随意
- [13] II ① 内在 ② 介入 ③ 偏在 ④ 遍在 ⑤ 顕在
- [14] III ① 両立 ② 妥協 ③ 混同 ④ 競合 ⑤ 矛盾
- [15] IV ① 簡潔 ② 間接 ③ 平等 ④ 正当 ⑤ 公的

問五 傍線部ア「問題は、しかし、ここから始まる。」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は [16]。

- ① 人生とは自己実現であるという考えは、悪いイメージではないが、人間を植物と同一視した誤ったとらえ方であり、現実の人間や社会のあり方と大きく食い違っているため、社会が空中分解してしまうという問題が生じている。
- ② 自己実現という考え方は、すべての人が豊かなポテンシャルを持つているというとらえ方に基づいているが、実際にはそのような人は少なく、誰もが夢を叶えられるわけではないという現実を見据えない、理想論に過ぎない。
- ③ 人生を個人の自己実現の場とみなす考え方は、あらかじめセットされた能力が開花するというイメージで人間をとらえているが、そのとらえ方自体に疑問があり、それが現実化すれば社会の存立が危ぶまれる事態になる。
- ④ 人生は自己実現のチャンスだという個人主義的な考え方は、熾烈な競争を生み、それに敗れた人が貧困に陥り、プライドも傷つけられるというだけでなく、社会全体も機能しなくなるといって、大きな問題をはらんでいる。
- ⑤ 私たちは、自己実現という個人主義的な考えを受け入れており、それは悪いイメージとは言えないが、一部の能力のある人だけが実現可能なもので、大多数の人には該当せず、かつ、社会全体もそれでは成り立たなくなってしまう。

問六 傍線部イ「これはもはや『自己実現』とは呼ばれないものだ。」とあるが、筆者がどのように考えるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は **17**。

① 「自己実現」と言っても、自己の能力というものを見出すことは極めて困難なため、現実には単なる欲求の満足に過ぎないものになってしまい、それでは「自己実現」とは言えないから。

② 「自己実現」と言う場合の自己とは、社会における多くの制約を受けたものでしかなく、それでは本来の「自己」の実現と言うことはできないから。

③ 「自己実現」とは欲求の実現であるが、それはあらかじめ個人の内に存在したのではなく、社会における需要と供給の関係によって決定されるものであって、「自己実現」とは言えないから。

④ 「自己実現」の実情は外部の他者との関係の中で生じる願望をかなえることだと見え、それを自己の能力の実現を意味する「自己実現」と表現するのは不適当であるから。

⑤ 「自己実現」と言っても、その場合の「自己」のイメージはどれも似たりよったりのものであって、そこには自己の独創性などというものは見られず、「自己実現」とはほど違いものであるから。

問七 傍線部ウ「自分自身との良い関係」を結ぶためにこそ、他者によって認められるという経験が不可欠」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は **18**。

① ありのままの自分という虚像によりかからず、人々の中に飛び込んで、真の自分の姿を厳しく見つめ直すことができれば、自分を知り、肯定的に受け止められる自分になることができるということ。

② 自分自身との良い関係を形成するためには、その前提として、積極的に自己の外に出、他者と競い合い、自分で自分を認めることが重要であり、その繰り返しの中で自分との良好な関係が作られるということ。

③ 人目を気にするのではなく、あえて人の目に自分をさらすようにすれば、人々の批判を浴びたりして鍛えられ、成長することができるので、自分でも肯定的に受け止められる自分になれるということ。

④ ありのままの自分を生きるのではなく、人との関係や社会性を重視し、周囲の人々に認められるような自分になろうと努力することで、社会性が身につくとき、自分を肯定的に受け入れるようになるということ。

⑤ 自分を正しく認識し、肯定的に受け入れるためには、あえて人々の中に身を置いて生きることで、大切な他者から認められることが必要であるということ。

問八

本文中の引用や具体例についての説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は **19**。

① 筆者自身が哲学科に進んだ経緯は、各々の人間が持つポテンシャルに本人は気づかないものだということを示している。

② ホネットの引用は、彼の承認論の中心の部分で、主体の維持が他者の承認によってのみ可能となることを示している。

③ 有森裕子の発言は、承認の一つのあり方として鮮やかに記憶されており、承認をめぐる筆者の主張を裏付ける。

④ キルケゴールの「死に至る病」は、筆者の主張とは対照的な考え方だが、承認の問題の厄介さを端的に示すものである。

⑤ サッカー選手や芸能人の例は、イメージが似通っているものの、誰もが自己実現を望んでいることを表している。

問九

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 筆者は、迷ったあげくに消去法で哲学者への道を選んだだけであって、決して哲学するためのポテンシャルが自らに備わっていたわけではないと考えている。
- ② 自己実現とは、実際には自己の能力の実現であり、人は他者との間に能力において大きな違いがないため、似たような自己イメージを抱いてしまう。
- ③ 人に認められることは幸いであり、それを軽んじるべきではないが、誰もが安易に認められるような社会のあり方は是正されるべきである。
- ④ 自己を犠牲にして社会に貢献する多くの人々が存在することで、社会が成り立っていることを考えれば、安易に自己実現を主張すべきではない。
- ⑤ 承認とは自己自身との関係をもとにした他者との関係の中で生じるものであり、その両者の関係を解き明かすことを、ホネットは試みている。